

仙台市聴覚障害者協会 菅原 伸哉

このたびは、仙台市障害者臨時委員に選出いただきましてありがとうございます。  
大変申し訳ございませんが、今回は所用により欠席させていただきます。先の東日本大震災では、  
障害をお持ちの方々それぞれに苦しい経験をされたかと思いますが、下に添付しました記事は、  
昨年、私自身が聴覚障害者という立場で、情報の入りにくさや遅れを痛感し、考えさせられた内  
容です。下記のとおり紹介いたしますので、少しでもご参考になればと思います。  
今後ともよろしくお願いいたします。

---

### 新聞記事の紹介

河北新報 平成 25 年 10 月 1 日（火曜日）

声の交差点

聴覚障害者に J R は配慮を

菅原 伸哉 45 歳

（仙台市太白区・福祉事務）

私は聴覚に障害がある。9月16日、仕事で大阪にいて朝8時の上り新幹線に乗った。台風18号からうまく逃れ何とか仙台に着けると考えた。

名古屋駅に到着すると、周りの乗客は皆降りて私だけが取り残された。ホームは人で埋め尽くされ、その人々が一斉に乗り込んできた。車内放送が流れているようだが、私には聞こえない。

すると突然、皆が座席を逆方向に動かし始めた。私は近くの人に東京方面を指しながら「東京？」と声を出した。その人は逆を指し「大坂」と答えた。折り返し運転になったと事情が分かり、慌てて降りた。

駅員に尋ねても無言で首を振り、「分からない」という表情。せめて紙に書くだけでも助かるのに。何とか乗り換えて、12時間かけて仙台に帰り着いた。

この長旅では、聞こえないことからくる情報格差に憤りさえ感じた。一人で移動する聴覚障害者も少なくない。電光掲示板も分かりづらく、詳細を把握できなかった。

### 『今までにない大震災』

菅原 伸哉

あの日の仙台市中心部。海からは離れており津波の被害は無かった。また、阪神淡路大震災のような大規模火災はなく、過去の震災を教訓に耐震構造が施された効果か、地震による建物の損壊も少なかった。しかし、さまざまな場面で、聞こえないことからくる情報格差に悩まされた。

私は勤務中にビルの中で被災した。地震がしばしば起こる地域でもあり、震度3～4程度の揺れに慣れていたせいか2日前の余震の続きだと思ったその揺れは、予想をはるかに超え、次第に激しさを増し、まさに大しけの中の船のようだった。目の前であらゆるものが落下し、天井が崩れ落ちるのではないかと思う水漏れ、そして停電。聞こえない分、視覚のみで感じた震災は、恐怖としか言いようがなく、生きた心地がしなかった。その後、ビル内に人々が集まり声による説

明があったものの、聴覚障害者は自分一人。状況は把握しきれなかった。許可がおり、周囲の真似をして行列に加わり徒歩で帰宅した。その時は、まさかあの大津波が襲ってきたとは思わなかった。私は翌朝の地元新聞社の朝刊によりその衝撃の事実を知ることとなった。中には情報源が少なく、しばらく後に知ったという聴覚障害者もいる。



### 公衆電話に並ぶ聴者

減っていく様子を妙に感じつつも待ち続け、いざ自分の番になると商品が何も無かったり、在庫切れの商品は何か、何品まで購入が可能なのか、整理券が必要なのかさえ情報が入ってこないという場面に多々遭遇した。また、ライフラインが停止したことにより、しばらくの間は工夫の連続。精神的につらかった。雪をかき集め水を確保し、灯油ストーブ、卓上コンロを使う日々。沸かした貴重な湯で洗髪する。新聞で銭湯の情報を知り自転車で見に行けば、信じられないほどの行列に愕然とする。他県の友人の支援を望みつつも、物流ルートが麻痺し、運送会社は人で溢れパニック状態になっていた。仲間同士で物々交換もした。

災害が発生し、緊急事態の状況下での聴覚障害者は、生活の不便さ等に加え、情報確保の困難からくる精神的負担は否めない。そこで、やはり災害を乗り越えるカギとなるのは、「身近な人との助け合い」である。日頃から隣り近所の人々と顔を合わせ、挨拶をする。そういったことから、自らの力で自らの環境を作る。より身近な小さい単位での行動が重要であり、それが聴覚障害への理解にもつながると私は考える。

地震直後から被災地を中心に大規模な通信障害が発生した。携帯電話の基地局が機能不全に陥った。携帯の電池が無くなり、使用可能だった公衆電話に駆け込む聴者の姿。しかし、停電により FAX もメールも使用できず通信手段を失った聴覚障害者はどうすればいいのか。

そして生活のあらゆる場でも、聴覚障害者の情報取得の遅れを感じた。コンビニエンスストア、スーパー、ガソリンスタンド等では、店員が音声のみで案内していた。途中行列が

